

審査の結果の要旨

氏名 小坂井 真季

本論文は6章からなり、第1章で本論文の課題が提示される。カンボジアでは1970年代にポルポト政権による大虐殺が起こり、多くの孤児を出し、その後も人身売買の犠牲となった子どもたちやストリートチルドレンなど、多くの子どもたちが養護施設で育てられてきた。ところが、施設養護は子どもの発達に悪影響を与えるという研究に基づき、世界の潮流は施設での養護を止め、家庭の中で育てるという「脱施設化」が主流となっている。カンボジアもその流れに従って脱施設化を進めているが、カンボジアの場合、施設には子どもたちの自立を助けるという重要な役割が残されており、その再評価を行なうのが本論文の目的である。

第2章では、脱施設化が国際的な潮流となっていく過程と、それに対するカンボジア政府の対応が示される。国際社会は子どもの権利を尊重し、施設養護から家庭養護への移行の必要性を訴えてきた。一方、カンボジア国内には内戦や人身売買等の影響で数多くのケア施設が設立されたが、その中には政府の監視が届かない施設もあり、国連子どもの権利委員会からの勧告を受け、カンボジア政府は養護施設の規制強化や代替的養護の整備に取り組んできた。

第3章では、カンボジアでケア施設に入居する子どもが発生する原因について分析が行なわれる。分析は、歴史、宗教、家族・親戚関係、農村コミュニティ、教育制度の観点から行なわれた。カンボジア社会では、強い性規範及び家父長制のために家庭内における子どもの立場が弱い。また女性に対する性規範が強く、性暴力の被害者が、周囲からの視線を恐れて被害を言い出せず、問題が深刻化する。このような子どもに不利な環境が施設入居者を生み出す背景にある。

一方、教育を受けることが入居の条件になっている施設が多いために、就学率の低い農村部で子どもに教育を受けさせる施設に入居させるということも行なわれてきた。

第4章では、第3章の仮説を検証するためにカンボジアで行なった現地調査について述べられる。調査対象は、カンボジア西部のバタンバン州にあるケア施設である。施設入居者の家庭環境を分析した結果、カンボジアの家庭内に存在している支配関係により親の不利益が子どもに蓄積している状況が明らかとなり、性暴力の被害者が性規範が強いために周囲に言い出せず、疎外されてしまう事例があった。コミュニティの人間関係が希薄なため孤立を深め、見知らぬ人を安易に信用し人身売買の被害にあっていた。

第5章では、ケア施設に入居した子どもたちが施設から受けたプラスの影響について分析が行なわれた。調査対象となった施設では、入居者に対して教育・職業訓練・ライフスキルの習得の機会を提供しており、それらの活動を通して入居者は自信を取り戻し、自立へと進む。日々の生活を通じた職員との関わりを通じて子どもたちは成長し、家庭が果たす機能を施設が果たしていることが明らかとなった。

子どもたちは自立することにより、家族の問題が入居理由であった子どもたちも、退所後は自信を持って家族との関係を改善する努力をするようになった。施設は退所後も支援を続け、衣食住の生活基盤と教育の機会を保障し、貧困の悪循環を断ち切るとともに、家族との関係が改善されてきた。

第6章では結論が述べられる。ケア施設は単に衣食住の場ではなく、広い意味での教育の場であり、自立に必要な様々な能力を身につけさせ、入所者の自立を可能にしてきた。自立を支援しない不必要な入所は避ける必要があるが、カンボジア固有の事情に考慮して、個々の子どもたちの事情に応じて施設入居が重要な選択肢であることが結論として示された。

よって本論文は博士(国際協力学)の学位請求論文として合格と認められる。

以上1, 528字